

オーストロ・マルクス主義とファシズム ——オットー・バウアーの1934年——

上 条 勇

- I はじめに
- II 2月闘争
 - (1) 闘争の経過
 - (2) 『オーストリア労働者の蜂起』
- III 亡命時代初期の活動
 - (1) 外国ビューローと非合法抵抗組織
 - (2) 闘争方針と展望
 - (3) ウィーナー会議
- IV 結びに代えて

I は じ め に

私は、去年（1990年）末に、J・ブラウントール著『社会主義への第三の道——オットー・バウアーとオーストロ・マルクス主義——』という訳書を出版した¹⁾。この訳書は、オットー・バウアーにかんする伝記が出版されていないこれまでのわが国の状況を考慮して²⁾、彼の生涯と思想を紹介することを意図したものである。

その訳者序論のなかで、私は、「バウアーとオーストロ・マルクス主義」の意義が、「社会福祉国家の形成にむけた資本主義の社会諸改良を当面の目標としながらも、社会福祉国家の歴史的限界を意識し、『民主主義的社会主義』の理想社会を究極の目標として掲げたことにある」と指摘しておいた。バウアーについて言えば、私のこのような評価は、もちろん定説として広く受け入れられているものではない。むしろ、第二次大戦後、バウアーの故国オーストリアでも彼は、一時期かなり低く評価されてきた。彼が長らく低く評価されてきたのには、理由がないわけではない。

その理由の一つとして、1930年代にオーストリア社会主義・労働運動がオーストロ・ファシズムに敗北し、ひいてはナチスによるオーストリアの併合下で悲惨な弾圧にみまわれるにいたった事実をあげることができる。ファシズムに敗北するにいたったオーストリア社会主義・労働運動の最高指導者として、バウアーが敗北の責任を問われることはやむをえなかった。バウアー自身、敗北の責任から逃れることはしなかった。さらに、ファシズムへの敗北は、オーストロ・マルクス主義の評価の点でもマイナスの影響を与えざるをえなかった。ファシズムへの敗北は、「オーストロ・マルクス主義の破産」を示すものと受け取られるむきもあったのである。

だから、「バウアーとオーストロ・マルクス主義」を再評価するにあたっては、バウアーらがファシズムに敗北するにいたった経緯と非合法活動時代におけるバウアーの役割を検討することが不可欠の課題となっている³⁾。小稿は、この課題のうち、1934年の2月闘争におけるオーストリア労働者の敗北⁴⁾および非合法抵抗運動初期の時代においてバウアーが果たした役割を素描するものである⁵⁾。

- 1) J・ブラウントール『社会主義への第三の道——オットー・バウアーとオーストロ・マルクス主義』拙訳、梓出版社、1990年。
- 2) バウアーの生涯と思想を取り扱った邦語文献として、米川紀生「Otto Bauer 生誕百年フェスティバルより」(〈三重大学〉『法経論叢』第4巻第2号、1987年3月)とオットー・バウアー著『オーストリア革命』訳者あとがき(酒井晨史訳、早稲田大学出版部、1989年)がある。
- 3) ファシズムへの敗北にいたるまでのバウアーを研究した邦語文献として、内田忠男「オットー・バウアー研究——ファシズムと民主主義」(『岐阜経済大学論集』第11巻4号、1977年12月)がある。
- 4) 「2月闘争とオーストリア社会民主党」にかんする研究として、矢田俊隆「1934の内乱とオーストリア社会民主党」(『成城法学』第11号、1982年)がある。
- 5) 小稿の作成にあたって、Joseph Buttinger, *Das Ende der Massenpartei, Am Beispiel Österreichs*, Verlag Neue Kritik Frankfurt, 1972にかなり依拠した。

II 2 月 闘 争

(1) 闘争の経過

1934年2月12日ファシスト護国団(Heimwehr)の度重なる武器捜査と弾圧に抗して、オーストリアの労働者はついに立ち上がった。闘争の火蓋は、リンツの共和国防衛同盟(オーストリア社会民主党の防衛組織、以下、防衛同盟)によって切って落とされた。

リンツの防衛同盟指導者ベルナシェク Richard Bernaschek¹⁾は、すでに前日(11日)オットー・バウアーのところに2人の使者を送り、党および防衛同盟にたいする攻撃には武器をもって抵抗する旨を、書簡で伝えていた。彼は、不況と社会民主党指導部による反ファシズムの決戦へのためらいが、労働者に脱モラル的な腐食作用をもたらし、その戦闘能力をいちぢるしく減じている状況を憂え、もうこれ以上待てないと考えたのである。

ベルナシェクの使者たちは、真夜中にオットー・バウアーと会った。バウアーは、妻のヘレーネと映画館から帰宅したところであった。バウアーは、二人の使者に武装抵抗の企てを延期するように説得した。彼の考えでは、数日以内に政府が社会民主党にたいする公然たる攻撃に移る兆候がある。政府がウィーン市政にたいして、護国団によって予告された攻撃を開始したとき、それは、効果的な防衛闘争へと大衆を奪い立たせるシグナルとなるだろう²⁾。

バウアーは、この時点で、反ファシズムの決戦を覚悟しはじめていたようである。彼は、

これまでドイツ社会民主党が戦うことなくしてナチズムに屈したことを批判していたし、オーストリアでその二の轍を踏まないことを決意していた。去年（1933年）10月の社会民主党党大会で、彼は、社会民主党等への暴力的な攻撃にたいして暴力的な抵抗を試みる決意をうたい、決戦をおこなう上での条件を確定していた。社会民主党のこの闘争方針にたいして、副首相を勤め、警察権力を握っていた護国団指導者ファイ（Fey）は、系統的な武器捜査と防衛同盟指導者の逮捕によって、社会民主党の戦闘力を削いでいった。加えて長年の不況による失業の増大、それに闘争に踏み切ることへの社会民主党の度重なるためらいが労働者の戦闘意欲を弱めていった。バウアーもこの辺の事情をよく認識していた。しかし、状況がいかに不利であろうと、戦うことなくして屈服するような不名誉な事態は避けたいと思っていた。そして、闘争をおこなう上での効果的な瞬間を待っていたようにみえる。

オーストリア社会民主党の最後の闘争において、これまでバウアーが決戦をためらい、思いまどい、責任の重圧に苦しみ悩んだ様子が、オットー・ライヒター Otto Leichter ら彼の友人たちによって伝えられている³⁾。このことから、バウアーが政治的指導者として不的確であったと決めつけられる向きもある。さらに思想的な点でも、バウアーがマルクス主義者として資本主義の崩壊を待つ宿命論者であり、客観的な必然性を強調することによって無為とか「待機主義」に陥ったとする非難も投げかけられている。この非難は、左右両側から投げつけられている。左側からは、決戦をためらったバウアーの思想的な欠陥として、右側からは、改良活動を軽視し、交渉と妥協の道を閉ざすにいった教義上の欠陥として。

ここで仮説的に敢えて述べるならば、バウアーがマルクス主義的な宿命論による待機主義に陥ったという批判は妥当ではないだろう。バウアーは、社会主義への漸次的な移行の観点から改良闘争を重視し、この点で大きな成果をあげた優れた議会政治家であった。さらに、左派と右派を巧みに統一し、大衆政党として社会民主党の発展に寄与したカリスマ的な政党指導者であった。そして、オーストロ・マルクス主義を代表する理論家でもあった。しかし、彼は、革命家でもすぐれた軍事指導者でもなかった。闘争へのためらいは、一般に学者タイプの知識人に特有な現象のようである。あれこれと客観的な分析をおこない、闘争諸条件の不利な点を斟酌しているうちに時期を逸した。（ドイツのナチズムとイタリアのファシズムに挟まれ、両者によって手玉にとられたオーストリアの運命とその客観的な条件の厳しさは、強調しても強調しすぎることはないのであるが。）これが真相であろう。J・ブラウントールがいうように、「国の母たち」への責任を感じ、犠牲を恐れるバウアーの性格的な弱さを指摘することもできる⁴⁾。とはいえ、バウアーが勇気を欠いていたわけではない。これは第一次大戦中に将校として従軍したときの彼の勇敢な態度からもうかがわれる。それはともあれ、バウアーは、戦うことなくして屈服するつもりはなく、事実

オーストリア労働者の2月闘争を見捨てなかったのである。

2月12日午前2時ごろ、ベルナシェクは、武装的抵抗の企ての延期を求めるウィーンからの電報(彼の派遣した2人の使者が発した)を受け取った。電文には、「オットー・オヨビエル・ストノヤ・マイオモン、クワダテ・エンキセヨ」とあった。電文が暗号で書かれていたにもかかわらず、この電報は警察の補足するところとなり、「クワダテ」とは何か、リンツ社会民主党事務所の置かれた「ホテル・シフ」にたいする警察の捜査を誘った(12日午前7時半)。ベルナシェクは、事務所にいた防衛同盟隊員に武器をもって抵抗することを命じ、こうして2月闘争の火蓋が切って落とされたのであった⁵⁾。

リンツからの闘争の知らせを聞いたとき、パウアーは、これが社会民主党の解体にむけた政府の絶好の口実になることを洞察した。12日午前9時ごろ、彼は、集まれるだけの人数ではあるが、グンペンドルファー Gumpendorfer 通りにある一住居で最後の社会民主党幹部会を招集した。パウアーは、防衛同盟隊員の動員とゼネストを提起した。そして中央闘争指導部(Kampfleitung)を設置した。ゼネストは、自由労働組合同盟書記のヨハン・ショルシュ Johan Schorsch との了解のもとで労働組合と共同して呼びかけられた。パウアーは、さらに宣伝担当のフェリックス・カニッツ Felix Kanitz に、すでに起草してあった「闘争の呼びかけ」を所定の印刷所で印刷するように命じた。(闘争宣言の印刷は、しかしストによる電気のストップによって印刷機械が動かず、挫折した。)ヨーゼフ・ブッチナー Joseph Buttinger によると、パウアーは、10時ごろ、オットー・ライヒターやポーラック Pollak のいる社会民主党中央機関紙『アルバイター・ツァイツUNK』の編集部に立ち寄ったが、何も指示を与えなかったという⁶⁾。

二月闘争について簡単に素描すると、ウィーンでは、リンツでの闘争が伝わるや、電力会社の労働者が仕事を放棄し、電気がとまり、市街電車がストップした。しかし、パウアーらの呼びかけたゼネストは不発に終わった。ゼネストの中核となるべき鉄道労働者たちは、長年の不況下すでに政府による恫喝と切り崩しにあっており、仕事を失うことを恐れて、列車を動かしつづけた。二月闘争のあいだ鉄道は動き続け、護国団兵士らを運びつづけた。

結局ウィーンでの戦いは、社会民主党のウィーン自治体政策の象徴として建設された労働者住宅街で、数千人の防衛同盟隊員らの諸グループがバラバラに戦う形でおこなわれた。大部分の社会民主党員と労働者はその日常生活を送りつつ、傍観するにとどまった。社会民主党指導部のあいだでさえ、十分に関係がとれていたわけではなかった。パウアーの盟友でウィーン市の敗政担当者ロバート・ダンネベルク Robert Danneberg は、キリスト教社会党の蔵相ブレスシュ Buresch と財政問題について協議した後帰宅したところで逮捕された。カール・レンナー Karl Renner は、交渉による解決を求め、ニーダーエーステルライヒ州知事ライター Reither 博士と協議するために州議会に赴いたところ逮捕された。ウィーン市長のカール・ザイツ Karl Seitz は、その執務室で逮捕された⁷⁾。

オットー・バウアーは、共和国防衛同盟の最高指導者ユリウス・ドイッチとともに労働者住宅街に設置された中央闘争指導部で指揮をとることになった。しかし、闘争がはじまってバウアーらの闘争本部は、敵の制圧地域下に置かれることになり、その指揮能力を失った。『回顧と反省』という著書で、エルンスト・フィッシャーは、闘争指導部と連絡がとれず、労働者の個々のグループがいかに自己の判断で戦わなければならなかったか、その混乱ぶりを描いている⁸⁾。彼我の武力の差は歴然としていた。政府側は、装甲車と大砲で武装し、労働者側を各個撃破できた。一方、労働者側は、第一次大戦の残した旧式の武器を手にとるしかなかった。それでもオーストリア労働者の2月闘争は、4日間つづくことになった。

バウアーは、彼の戦いについて、こう述べている。すなわち、われわれは、火曜日（2月13日）早朝まで闘争指導部で活動が続けた。しかし、それはもはや不可能になった。そこでわれわれはこの日闘争指導部を2つに分け、それぞれ別の所在地に移した。われわれは、今なお闘争しているグループの一つのところに移ろうと試みた。しかし、この試みは失敗した。われわれは闘争グループから遮断された。私は変装して街頭にいたとき、敵に見つけられたが、不思議な偶然によって逮捕を免れた。ドイッチは負傷した。われわれのいた全市街地で戦闘が終わったとき、私はチェコスロヴァキア国境に向かうことを決心した。国境を越えるとき、私の懐にはわずか150シリングがあったにすぎなかった⁹⁾。

ラウマン Raumann は、『オーストリアにとってあまりに偉大な』という著書のなかで、次のように書いている。

バウアーは、2月闘争の日々、ウィーン第10自治区のフェイフォリテンにある労働者アパート（「アホルンホフ」）にいた。建物が保安部隊に包囲されたとき、バウアーは、ドイッチにこう語った。私は毒を所持しており、自分が逮捕される前に服毒するつもりだ、と。しかし、ドイッチは、バウアーに逃亡するように説き、2人はこの逃亡に成功した¹⁰⁾。

ブッチンガーは、この点、バウアーやラウマンとやや異なる報告をおこなっている。ブッチンガーによれば、真相はこうであるという。

バウアーは、闘争が始まった翌日の13日（火曜日）、もはやウィーンにとどまることは意味がないと考えて、逃亡の準備をするように協力者たちに伝えた。チェコスロヴァキアのドイツ人社会民主党書記局からエルンスト・パウル Ernst Paul が車でウィーンにやってきてバウアーの逃亡を手伝うことを申し出た。火曜早朝バウアーは、約束の場所でパウルの車に乗るために、市場への買物客に変装して家を出た。プラハで発行されている『ゾチアルデモクラット』（Sozialdemokrat）の編集者エミール・フランツェルの旅券を携えて、バウアーはチェコスロヴァキアへと国境を越えた。

ブッチンガーは、バウアーがオーストリアからの逃亡の日付を偽り、2日ばかり遅らした事実（おそらく戦闘の最後までウィーンにとどまったというバウアーの発言を指してい

と思われる)を指摘し、その理由が宣伝を考慮したことにあると推察している。(パウアーも指摘しているとおり、オーストリア政府は、ピラ等でパウアーらが闘争がはじまって間もなく労働者を見捨て逃亡したと宣伝していた。)が、ブッチナー自身は、この事実を軽く扱い、むしろ、ドイツが自分の逃亡の冒険談を語り、後に怪我したとして左目に眼帯をつけた写真をオーストリア国内の非合法運動家に配ったのにたいして、パウアーが逃亡について言葉少なく、控え目に扱ったことに好意を示している¹¹⁾。事実関係としてブッチナーとパウアーの申告のどちらが正しいか、判断するのは難しい。ただ、私には、火曜日に闘争指導部の移転と戦闘グループとのコンタクトをはかったというパウアーの発言が作り話であったとは思われない。J・ハナック Jacques Hannak が指摘していることだが、おそらく14日(水曜日)までパウアーらがウィーンの労働者住宅街にとどまっていたというのが真相であったと推察される¹²⁾。

それはともあれ、パウアーは、エルンスト・パウルの助力下にチェコに脱出することに成功した。彼は、最初国境沿いの都市ブラチスラバに滞在した。そして、そこでオーストリア労働者の2月闘争を総括した小冊子『オーストリア労働者の蜂起』を書いた。この小冊子の巻末に書かれた日付(1934年2月19日)からして、パウアーが、2月闘争の敗北の直後、生々しい印象の薄れぬうちに、わずか数日で一気に書き上げたことがうかがわれる。この小冊子は、2月闘争の真実を伝えると同時に、これまでの彼の闘争の総括をおこなったものである。以下、節を改めて、これを簡単に紹介することにした。

1) ベルナシェクを研究した論文として、内田忠男「オーストリア：1934年2月12日——ベルナシェクと共和国防衛同盟(1)——」(『岐阜経済大学論集』第12巻第4号、1978年12月)がある。

2) J. Buttinger, a. a. O., S. 12f.

3) Otto Leichter, *Otto Bauer. Tragedie oder Triumph*, Wien Frankfurt Zürich, 1970, S. 34f.

4) J・プランタール、前掲訳書、172頁。

5) J. Buttinger, S. 12ff.

6) Ebenda, S. 17. Walter Pollak, *Sozialismus in Österreich*, Wien-Düsseldorf, 1979, S. 208.

7) Buttinger, Ebenda, S. 20. Pollak, Ebenda, S. 209f.

8) エルンスト・フィッシャー『回顧と反省』池田浩士訳、人文書院、1972年、303頁以下。

9) Otto Bauer, *Der Aufstand der österreichischen Arbeiter*, 1934, in: *Otto Bauer. Werkausgabe* (以下, WA.), Europaverlag, Bd. 3, S. 986f.

10) Viktor Reimann, *Zu groß für Österreich. Seipel und Bauer im Kampf um die Erste Republik*, Molden, Wien-Frankfurt-Zürich, 1968, S. 362.

11) J. Buttinger, a. a. O., S. 51f.

12) Jacques Hannak, *Im Sturm eines Jahrhunderts. Eine volkstümliche Geschichte der Sozialistischen Partei Österreichs*, Wien, 1952. S. 404.

(2) 『オーストリア労働者の蜂起』

『オーストリア労働者の蜂起』(以下、『蜂起』と略)は、導入部で、2月闘争の開始の光景を描写した後、1930年代の出来事を中心にオーストリアの政治史の動きをまとめ、続

いて詳しく2月闘争の経過と闘争で果たしたバウアーらの役割を叙述している¹⁾。『蜂起』の後半は、2月闘争における労働者の敗北の原因の分析と将来の展望に当てられている。ここでは、便宜上敗北の原因と将来の展望を取り扱った後半部分を中心に『蜂起』を紹介する。

オットー・バウアーは、闘争の敗北の責任のがれをしなかった。いさぎよく敗北の責任を他の誰よりもみずからに帰したのである。とりわけ、1933年3月15日、議会活動を再開させる試みがドルフス政府によって暴力的に阻止されたとき、このときが労働者の武装闘争を開始する上での絶好の機会であったという。この点、バウアーは、こう述べている。

「われわれは、3月15日にドルフス政府にたいしてゼネストで応ええたであろう。効果的に闘争をおこなう条件としては、このときほど有利なときはなかった。劇的に進行したドイツの反革命は、当時大衆を揺り動かした。労働者大衆は闘争の合図を待った。当時鉄道員は、11か月後ほど切り崩されていなかった。当時政府の軍事組織は、1934年2月の時点よりはるかに弱かった。当時われわれは勝利しえたであろう。」²⁾

バウアーは、当時闘争に踏み切ることには怖気づいた事実を認めた。そして、愚かにもドルフスによる憲法改革の約束を信じ、内戦を避けるために交渉による平和的な解決を求め、ついには不利な条件のもとで内戦に踏み切るにいたった事実を認めた。彼は、「これは誤まり——われわれの宿命的な誤まりであった」と告白する³⁾。これまでバウアー評価において、誤まりを認めるこの告白は、前後の脈絡から切り離して強調されるきらいがあった。しかし、バウアーは、無条件に自分の誤まりを認めたわけではない。また、敗北の原因を彼の戦術上の誤まりだけに求めたのではない。この点、バウアーにそくして、もう少し立ち入って検討しよう。

バウアーは、『蜂起』において、左右両側から彼に投げかけられた批判に反論しようとしている。彼によれば、右派からは、彼が長年教条主義にとらわれ、あまりに急進主義的であったので社会民主党の崩壊を招いたという批判がなされている。逆に左派からは、彼があまりにも右翼的すぎ、革命的な生気に欠き、闘争に怖気づき、闘争を長く先延ばしにしたせいで社会民主党の敗北にいたったという批判が投げかけられている。この左右両側からの批判にたいして、バウアーは、反ファシズム闘争の戦術が決して固定的なものではなく、その時々的情勢によって規定されることを強調する。そして、彼のとったそのときどきの戦術について一つ一つ点検する。

まずバウアーは、1932年の地方選挙でオーストリア・ナチスが躍進した時点での彼の戦術に目を向ける。このとき、バウアーは、プレシュ政府にたいして強硬な野党政策をとり、そのことによって、恐慌で貧困化し、怒り狂った大衆がナチス支持に向かうことを防げうると信じた。この政策の結果、キリスト教社会党と護国団との同盟が生じ、ドルフスは護国団指導者ファイと共同して政府を形成するにいたった。バウアーは、政府のファシズ

ム化を促したこの野党政策を「左翼的な偏向」であったと認める。彼は、もしも政府にたいして寛容政策をとったならば、護国団の政府参加を防ぎえたであろうと言う。しかし、彼は寛容政策をとらなかった。パウアーによれば、その理由は、ブリューニング政府にたいする寛容政策によってドイツ社会民主党が陥ったのと同じ状況に陥るのを恐れたことにある。また、1930年における護国団によるクーデターの危機を政治的な駆引きで切り抜けた経験にとらわれて、政府のいっそうのファシズム化の危険を軽視したことも認める。

さらにパウアーは、1933年3月4日におけるレンナーら国会正副議長の辞職事件を取り上げる。国会は、政府による鉄道員のスト処分にかんする議決の取り扱いをめぐる紛糾し、ついにはレンナーらの議長辞職にいたった。これは、たった1議席差の多数という脆弱な議会基盤に支えられたドルフース政府による議会排除の口実を与えることになった。ドルフース政府は、この後、ドイツにおけるナチスの勝利の影響を受けつつ、次々と独裁政治への布石を打っていくのである。パウアーは、レンナーの議長辞職（パウアーの要請下になれた）が誤まりであり、「左翼的な偏向」であったと認める⁴⁾。

この後に、先に取り上げた3月15日における戦術的な誤まりの告白がつづく。パウアーは、「宿命的な誤まり」とみずから認める、このときの決戦の回避が、「右翼的な偏向」であったと特徴づける。

このように、パウアーは、左右両側からの批判にたいして、結局、左翼的偏向であったか右翼的な偏向であったかは、事後的に正しいと確認される道に照らしてそれぞれ判断されるにすぎないと答える。そして、誤まりを犯したことを認めた上でなおも次のような問いを発する。すなわち、別の政策や戦術をとったとしても、ドイツにおけるファシズムの勝利後には、オーストリアの反革命を一般に防ぎえたであろうか？と。パウアーは、この点、こう述べている。

ブレスシュ政府にたいしてオーストリア社会民主党が寛容政策をとったら、ドイツ社会民主党の〈没落の〉道と同じ道をたどることにならなかったか？レンナーの議長辞職がなかったとしても、ドイツにおけるナチズムの勝利に強いられて、ドルフース政府は議会排除の別の口実を考えなかっただろうか？3月15日に戦いを開始したならば、内戦は、黒と褐色（オーストロ・ファシズムとナチズム）の連合をもたらし、ヒトラーによるオーストリアの支配を招かなかったか⁵⁾？

パウアーは、このように、個々の政策上戦術上の判断がいかに難しかったかを強調し、結局は、オーストリアにおける労働者階級の敗北の原因が、個々の政策・戦術上の誤まりよりももっと深いところにあったと述べている。つまり、その原因が経済恐慌による階級対立の激化とドイツにおけるナチズムの勝利にあったとしている。

パウアーによれば、経済恐慌によってオーストリアのブルジョアジーは、困窮に陥り、賃金切下げと社会保障負担の撤廃を求めた。彼らは、これに反対する社会民主党とプロレ

タリアートに憎悪の念を向けた。経済恐慌は、また、小ブルジョアと農民を零落させた。彼らは、自分らを救済しえなかったブルジョア民主主義を見捨て、別な道に救済を求める。こうして、小ブルジョアと農民の息子たちは、護国団に流れていき、ファシズムにとって機が熟していったのである。ブルジョアジーは、労働組合を打ち破り、その社会的な諸成果を撤廃するために民主主義を攻撃した。かつての貴族、将軍たちは、権威主義的国家の樹立をめざして、小ブルジョアと農民の息子たちを集め、民主主義を攻撃した。ちょうどこのとき、労働者階級の力は、失業者が3分の1以上に達するなど、経済恐慌によって著しく弱められた。オーストリアの国内政治の展開を大きく規定したのは、ドイツにおけるナチズムの勝利である。貴族、将軍、ブルジョアジーは、ヒトラー勝利によって生じた反マルクス主義的な気分の盛り上がりを利用して、土着のファシズム（オーストロ・ファシズム）の樹立をめざした。その結果、労働者階級は、降伏か、絶望的抵抗かの選択をおこなうように追い詰められた⁶⁾。

バウアーは、このように、経済恐慌とドイツのナチズムの勝利が、オーストリア社会民主党と労働者階級の悲劇をもたらしたと結論する。彼は、別のところで、イタリアとドイツの二つのファシズム大国の内政干渉が、オーストリアにおける政治的経過を規定したとも述べている⁷⁾。彼は、結局、社会民主党がどんなにうまく立ちまわったとしてもオーストリア労働者の敗北が不可避免的であったという考えを暗示しているようである。

私は、「オーストロ・マルクス主義の悲劇」にかんするバウアーの以上の考えの多くに賛同しう。スイスなどとは異なり、オーストリアは、ドイツ民族の統一の名のもとに、ヒトラーによって真っ先に併合の対象とされた。オーストロ・ファシズムにたいして社会民主党と労働者が戦いに勝利したとしても、それがかえってイタリア・ファシズムとドイツ・ナチズムの外交ゲームと内政干渉の口実とか機会を与えることになりはしなかっただろうか？イギリスとフランスが、武装闘争の勝利によって形成される労働者政権に理解と支持を示しただろうか？このように色々な疑念が浮かんでくるのであるが、それでもなお次のことは言える。バウアーも認めているように、3月15日にバウアーらがゼネストと武装抵抗を決意しなかったのは「宿命的な誤まり」であった、と。それは、この時点が戦いに非常に有利であったという理由からだけではない。バウアーらは、オーストリア社会民主党リンツ綱領（1926年）のなかで、ブルジョアジーによる民主主義の破壊攻撃にたいしては暴力（独裁の手段）に訴えてもこれを阻止すると高らかにうたった。3月15日がまさにリンツ綱領に予定されたといえる民主主義の破壊にたいする暴力的決戦の日であった。バウアーらがこの日戦いを決意しなかったことは、リンツ綱領の公約違反として、オーストリア労働者にモラル的に悪影響を与えたし、また、「オーストロ・マルクス主義」にたいする後世の評価に大きく影響したといえる。

最後に、『蜂起』で述べられたバウアーによる将来の展望に言及しておこう。

将来を展望する上で、パウアーは、オーストリア労働者の2月闘争が勝利の見込みのないものであったとしても、彼らが闘争なき降伏よりも、絶望的な闘争を選んだことで国際社会主義の革命的な名誉を救ったと高く評価している。彼は、ドイツ労働者階級が戦うことなくナチズムに屈したのにたいして、オーストリア労働者階級の英雄的行為を讃え、こう述べている。

労働者は、オーストリアの共和国防衛同盟の英雄的行為をその子供に伝え、自由をめぐる闘争の精神を教育するであろう。この犠牲を種子にして、将来のオーストリア社会民主党の勝利に満ちた再建が展望される⁸⁾。

パウアーは、以上のように、オーストリア労働者のヒロイズムを讃える。そして、オーストロ・ファシズムとナチズムのどちらが勝利したとしても、ファシズムはいずれにせよ戦争を招き、さらに戦争は革命をもたらすであろうと将来を展望して、『蜂起』を終えている。

- 1) これを紹介したものとして、米川紀生『Otto Bauerの二月闘争論』（『新潟大学経済論集』第24号、1977-II,）がある。
- 2) Otto Bauer, *Der Aufstand der österreichischen Arbeiter*, a. a. O., S. 989.
- 3) Ebenda.
- 4) Ebenda, S. 987f.
- 5) Ebenda, S. 990.
- 6) Ebenda, S. 990ff.
- 7) Ebenda, S. 974.
- 8) Ebenda, S. 983f.

III 亡命時代初期の活動

(1) 外国ビューローと非合法抵抗組織

パウアーは、プラスチラバに短期間滞在した後、さらにブリュン（ブルーノ、これもウィーンからさほど離れていないチェコの都市）に居を移し、そこでおよそ4年ほど亡命生活を送ることになった。

ブリュンには社会民主党書記局からの亡命者が集まってきた。パウアーは、ブリュンに着くやただちにオーストリア国内の非合法運動を援助することを目的とした機関として「オーストリア社会民主主義者外国ビューロー」(Auslandsbüros österreichischer Sozialdemokraten)を組織した。彼は、そこで、週刊の形で『アルバイター・ツァイツUNK』紙を発刊し、さらには『カンフ』(Der Kampf)誌の編集も引き受けた。『アルバイター・ツァイツUNK』紙の創刊号は2月25日に出された。それは、安易にも、郵便を通してウィーンと地方の社会民主主義者たちに配布された。そして、オーストリア国内の非合法運動から

その種の危険な配布方法を止めるようにという要請をただちに招いた¹⁾。

パウアーは、旧社会民主党の敗北に責任のある旧世代の指導者であるとみずから認じ、新党の指導は新しい精神で若い世代に担われることを希望した。そして、ジャーナリズムおよび社会主義労働インターナショナル(SAI)の場などをとおしてオーストリア国内の非合法活動を援助することをみずからの任務としたのである²⁾。パウアーの権威は、2月闘争の敗北によって揺らいだとしても、決して失われたわけではなかった。むしろ、その後生じた個々の非合法グループは、その活動の権威づけを求めてパウアーとの接触を試みた。フリードリッヒ・アドラーとパウアーは、秘密裡に移された党資金を掌握していた。パウアーらから資金援助を得ることは、オーストリア国内の非合法運動にとってその活動の正統性を認められることを意味した。

2月闘争の敗北直後の日々、パウアーは、オーストリア国内の状況、何よりも敗北した指導者である自分の評価を知りたがった。そして、心の晴れぬ日々を送った。3月2日、オーストリアを脱出して、ケーテ Käthe およびオットー・ライヒター夫妻がパウアーを訪問してきた。ライヒターの報告は、パウアーを喜ばせた。パウアーは、それによってみずからの信頼に堪えると思われるオーストリア国内の非合法運動グループの存在の詳細を知ることができた。

ウィーンでは、2月闘争敗北直後、ライヒターとオスカー・ポーラックら旧『アルバイター・ツァイツUNK』編集員を中心に「影の委員会」(Schattenkomitee)が形成された。彼らは、表に立つことを避け、非合法活動の担い手として青年活動家による「5人グループ」(Fünfergruppe, 5人単位の組織)の結成を試みた。2月末にマンフレッド・アッカーマン Manfred Ackermann を議長とする「中央5人グループ」が組織された。「5人グループ」は、ライヒターにパウアーら亡命グループとの接触を委託したのである³⁾。

パウアーは、ライヒターとの会話を通じて、はじめてオーストリア国内の非合法運動としっかりとした結びつきを得たと感じた。ライヒターらのグループは、パウアーの精神的・政治的な権威を認め、彼に忠誠を誓い、彼による組織の認知を求めた。パウアーは、すでに多くの非合法活動グループから手紙等でその存在の知らせを得ていたので、ライヒターらのグループを「唯一」正統な指導部として承認することはできなかった。とはいえ、資金援助等みずからの助力を惜しまないことを約束した。

「中央5人グループ」は、崩壊した旧社会民主党と一線を画すために、やがて「革命的社会主義者」(RS, Revolutionäre Sozialisten)という名前を名のりはじめる。この名前は、すでに1934年3月9日に「中央5人グループ」の最初の声明を出す際に、その署名問題をめぐって考え出された。つまり、その際、「オーストリア革命的社會主義者中央委員会」(以下、「中央委員会」と呼ぶことにする)という署名が考えられたのである⁴⁾。

「中央委員会」は、非合法活動家の急進化と旧オーストリア社会民主党の誤りにたい

する批判の高まりのなかで、旧党の民主主義路線とは異なる非合法活動の方針を必要とした。3月18日付の『アルバイター・ツァイツUNK』紙におけるバウアーの論説「古い目標への新しい道」は、この要求に応えるものであった。この点、バウアーはこう述べる。

オーストロ・ファシズムが民主主義を破壊した経験は、経済的権力手段が資本家、大土地所有者、教会の掌中にあるかぎり、これが民主主義の破壊に役立てられることを教えている。したがって、オーストリアにおける革命的な人民蜂起は、さしあたって「労働者階級の革命的独裁」の樹立を目標とする。オーストリアでは、この革命的独裁が資本家らの経済的権力手段を破壊する任務を果たした後に「現実的で永続的な真の民主主義」が可能となる。「昨日のブルジョア民主主義の再建ではなく、労働手段と労働収益の人民所有に基づいた真の、したがって社会主義的な民主主義への過渡的形態としての革命的独裁、これがわれわれの目標である。」⁵⁾

社会主義的民主主義への過渡的形態としての革命的独裁——これは、若干の修正をおこなないながらも、亡命時代にバウアーが一貫して追求し目標であった。それは、非合法運動の新たな目標を求める「中央委員会」の要求に一致したものであった⁶⁾。バウアーは非合法党の組織原則案も作成したが、これにも一応敬意がはらわれた⁷⁾。この時点では、バウアーと「中央委員会」の関係は、良好であったといえる。しかし、間もなく両者の関係はギクシャクしはじめる。

1934年3月21日、アッカーマンが警察に逮捕された後、カール・ハンス・ザイラー Karl Hans Sailer が「中央委員会」議長のポストを引き継いだ。ザイラー議長のもとに発足した新「中央委員会」は、共産主義者の社会民主主義批判をかわし、大衆のラディカル化に応じるために、旧オーストリア社会民主党の伝統を断ち切ることを決意した。彼らは、言葉の上で労働者階級の独裁を告白しながらも、なおかつ旧党の伝統を継承しようとするバウアーらの態度に不満をいだいた。彼らは、ブリュンの「外国ビューロー」にたいしてみずからのイニシャティヴを確保する必要を感じた。つまり、バウアーを単なる助言者にとどめるべきだと考えたのである。そして、中央委員会の機関紙として『革命』(Revolution)を発行する決定を下すと同時に、『アルバイター・ツァイツUNK』紙を「革命的社会主義者機関紙」とする要求をバウアーらに提出したのである⁸⁾。

旧社会民主主義的伝統との断絶を主張するザイラーら革命的社会主義者たちの態度にたいして、バウアーは不快の念を抱いたようである。バウアーは、また、ザイラーらとの最初の会見で彼らにあまりいい印象をもたなかった。『アルバイター・ツァイツUNK』紙を「革命的社会主義者機関紙」とすべきだというザイラーたちの要求もバウアーには僭越なことだと思われた。バウアーは、非合法活動グループの一つをなすにすぎないザイラーらが、かつてに社会民主党の党名変更を求めていると考えた。ザイラーらの要求にたいして、5月27日付の『アルバイター・ツァイツUNK』紙上の論説において、バウアーは、こう答え

ている。

多くの同志たちは、『アルバイター・ツァイツUNG』紙をオーストリア社会民主党機関紙ではなく革命的社会主義者機関紙とすることを希望している。彼らは、旧党名を用いることによってあたかもわれわれが昨日のブルジョア民主主義を闘争目標とするような誤解を生むことを恐れ、より革命的な性格をもつ名前を求めている。しかし、党名、綱領、組織規約については、オーストリアで戦っている非合法活動家の全党会議が決定すべきことである。全党会議が党名を変更しないかぎり、われわれは、旧党名を維持する。ブルジョア民主主義がファシズムによって破壊された今、革命によってプロレタリアートの独裁を樹立する任務が与えられるが、目標は依然として社会主義的民主主義である。独裁は、この（旧来の）目標を実現する手段である。この意味でわれわれは、今日もなお社会民主主義者だと安心して名のることができる。任務と目標で一致しているのに、名前をめぐる争うのは愚かである⁹⁾。

つまり、社会民主主義的伝統との断絶を求め、そのために党名の変更を企てる動きにたいして、バウアーは、党名変更が全党会議の要件であるといいつつも、自らは党名の変更に反対したのである。（実際に1934年5月の『キャンプ』誌上の論文において、バウアーは、「われわれは、わが党の名前を変える必要がない」と明言している。¹⁰⁾）彼によれば、社会民主主義が社会主義的民主主義を目標にし、この目標が今日もなお生きているかぎり、社会民主主義を放棄するいわれはない。むしろ、社会民主主義の伝統を維持しつつ、ファシズムの支配の現状に応じて目標達成の手段を変更するだけでいいのである。結局、当時バウアーは、社会民主主義の古き伝統の擁護者として登場した。というのは、古き伝統の擁護は、オーストリア社会主義・労働運動におけるこれまでのバウアーの活動を擁護することをも意味したからである。

5月中旬、当時チューリッヒにいたオットー・ライヒターは、新「中央委員会」にたいする強い不満を表明したバウアーからの手紙を受け取った。ライヒターは驚いた。そして、バウアーが、革命的社会主義者らの「中央委員会」にたいする認知を取り消し、別の「社会民主主義」的指導部を作ることになるのではないかと恐れた。ライヒターは、ただちにブリュンのバウアーのところを訪れた。ライヒターは、新「中央委員会」の新方針が、人事の交代によってではなく、大衆の急進化など状況の変化から生じたことをバウアーに力説し、この点、バウアーが誤解していると述べた。バウアーは、状況の変化を熟知していたが、新「中央委員会」の能力にたいする疑念を拭いがたかった。しかし、バウアーは、外国から非合法運動に強圧的に干渉することが事態をなお悪化させると考えた。そして、「外国ビューロー」と「中央委員会」との協力関係をなおも維持する考えをライヒターに告げたのであった¹¹⁾。

結局、バウアーとザイラーは、妥協するにいたった。ザイラーは、バウアーとの関係を

断ち切ることは思いもよらず、したがって、旧社会民主主義的伝統にたいする批判でパウアーを刺激することを避けるにいたった。パウアーも、7月初めにザイラーが彼を訪問してきたとき、ザイラーの指導を認め、旧来の協力関係を再建するにいたった¹²⁾。

2月中旬いらいの経過をみると、パウアーがオーストリア国内の非合法運動にたいしてかなりの影響力を行使してきたことがわかる。パウアーの役割は、単なる相談役とか助力者にとどまらなかった。彼は、旧オーストリア社会民主党の名誉と伝統をあらゆる攻撃から守ると同時に、オーストリア国内の非合法運動に新指針を与えるだけでなく、その正統性を認知する役割をも果たしたのであった。彼は、旧社会民主党の敗北の責任を認め、非合法運動の指導を若い世代に任せ、自らは助力者の地位に退くと宣言することによって、かえって「教祖」のような存在となり、強い影響力を保持できたのである。

1) J. Buttinger, a. a. O., S. 57.

2) Otto Leichter, a. a. O., S. 36f. J・ブラウンタール、前掲拙訳、188頁。

3) J. Buttinger, a. a. O., S. 38-59.

4) Ebenda., S. 66.

5) Otto Bauer, Neue Wege zum alten Ziel, (*Arbeiter-Zeitung* <以下, *AZ.*>), 18. 3. 1934), in: *WA.*, Bd. 7, S. 520f.

6) J. Buttinger, a. a. O., S. 106f.

7) Ebenda, S. 115ff.

8) Ebenda, S. 125ff.

9) Otto Bauer, Um den Namen der Partei, (*AZ.*, 27. 5. 1934), in: *WA.*, Bd. 7, S. 522f.

10) Otto Bauer, Die Strategie des Klassenkampfes, (*Der Kampf*, Jg. 1, 1934), in: *WA.*, Bd. 9, S. 374.

11) J. Buttinger, S. 144-153.

12) Ebenda, S. 181.

(2) 闘争方針と展望

既述のように、1934年3月18日付の『アルバイター・ツァイツUNK』紙の論説で、パウアーは、社会主義的民主主義への過渡的形態として革命的独裁の樹立をめざすという一般的な闘争方針を立てた。彼によれば、ブルジョア民主主義の再建は、もはや目標とならないという。この一般的な闘争方針は、その後も一貫して貫かれていくが、その時々状況のいかんで、具体的な内容の点でかなりの違いをみせる。1934年の範囲では、『カンパ』誌上のパウアーの論文「革命の諸前提」が、非合法の革命的闘争の具体的な内容についてもっとも詳しく考察している。以下、ここでは、この論文を中心にし、他の論稿で補う形で、亡命時代初期におけるパウアーの闘争方針と将来の展望について検討したい。

2月闘争直後に書いた小冊子『オーストリア労働者の蜂起』のなかで、パウアーは、オーストロ・ファシズムとナチズムのいずれが勝利しようとも、ファシズムはいずれにせよ戦争を招き、さらに戦争は革命をもたらすであろうという展望を描いた。ファシズムによる

戦争→革命という将来の展望は、長期的な見通しとしてバウアーの考えのなかに貫いていく。「革命の諸前提」という論文では、この点、少し具体的に次のように述べられている。

東洋では日本帝国主義の大陸侵略の動きがソ連国境に達し、日本とソ連の衝突・戦争が全西欧諸国に波及し、世界戦争をもたらす可能性がある。新しい戦争は、ヨーロッパの大部分で人民大衆の革命化を招く。戦争によって生み出されたヨーロッパ革命の結果、オーストリアでもプロレタリア革命が生じるであろう。一方、西欧ではヒトラー・ドイツの再軍備の動きがある。フランスとその同盟諸国が、ドイツの戦争準備を座して待つことはありそうもない。フランスらは、時期尚早の形でヒトラーに戦争に踏み切るか、屈服するかを選択をせまることはありそうだ。屈服は、ヒトラー体制の倒壊を招き、ドイツで革命的過程を生み出す。これはオーストリアにおけるプロレタリア革命の客観的前提を形成するであろう。ヨーロッパ・レベルでの新しい戦争か、あるいはドイツ革命の枠内でヒトラーの打倒の結果として、オーストリアにおけるプロレタリア革命が生ずる可能性がある¹⁾。

ここでは、日本帝国主義の侵略行動が世界戦争の引金になりうるという展望、さらに、フランスがヒトラーの再軍備政策に圧力をかけ、ヒトラーがこの圧力に屈服するという展望がつけ加えられていることが注目される。バウアーは、このように、長期的には、戦争等によって引き起こされる全ドイツひいてはヨーロッパの次元での革命的変動過程の一環として、オーストリアの反ファシズム革命を構想していた。しかし、他方では、上記の論文のなかで、バウアーは、別の考慮をも示している。すなわち、彼は、こう述べている。

オーストリアのファシズムは、ドイツおよびイタリアのファシズムよりはるかに弱体である。内部分裂しているし、支配装置も敵対的諸勢力に分かたれている。それにオーストリアは、経済的に動揺している。また、国民の圧倒的多数がファシズムに反対している。「ヨーロッパで新しい戦争がまだ燃え上がる前、ドイツで褐色の独裁がまだ打倒される前に、オーストリアのファシズムが、孤立的なオーストリア革命によって打倒されることは、非常にありうる話だ。」²⁾

バウアーは、このように、オーストロ・ファシズムの弱体さからいって、オーストリアで孤立した形で反ファシズム革命が勃発する可能性があると指摘している。その際、バウアーは、とりわけドルフース首相の殺害をもたらしたナチス一揆（7月25日）の後に生じた、将来の楽観的な見通しにたって論じているように思える。

この点、他の論稿によって少し補足しておく、5月の時点では、バウアーは、ファシスト独裁が一定の安定状態にいたっていることを一応認めていた（たとえば、5月のある論文に「安定したファシスト権力」という表現がみられる³⁾）。しかし、6月に入って、ナチスが不穏な動きを見せはじめたとき、彼は、「オーストロ・ファシスト独裁が安定化に成功していない」と述べ、「思っていたより早くわれわれの〈勝利を告げる〉時の鐘が鳴るであろう」と予測するにいたっている⁴⁾。

ナチスの一揆によるドルフース首相の殺害（7月25日）直後の『アルバイター・ツァイツUNG』紙の論説（「革命は進行する」7月29日）では、パウアーは、「永続革命の状態」を宣言し、こう述べている。

ファシスト独裁の樹立が招いたオーストリアの今日の状態の主要責任者ドルフースは、その行為を自分の命であがなわなければならなかった。将来がどうなるかまだわからない。が、今日一つのことは、確かだ。すなわち、オーストロ・ファシズムは、回復不能な道德的打撃をこうむった。オーストロ・ファシストは、テロルを強化して、その支配をなお2、3週間延命させることをもう一度試みるかも知れない。これは成功しないだろう。オーストロ・ファシストとナチスとのあいだで闘争がなされている。なお第三の勢力があり、それは労働者階級である。ファシストのどちらかに味方することはわれわれの任務ではない。われわれは、ファシスト政府の打倒のために闘争する。備えよ、労働者たち！君達の〈勝利の〉時を打つ鐘の音がまもなく響きわたる⁵⁾。

パウアーは、このように、7月29日の時点では、2、3週間以内にもファシスト政権の崩壊がありうるという楽観的な見通しを示している。「革命の諸前提」という論文では、パウアーは、なおもこの楽観的な気分の延長線上に、反ファシズムの孤立したオーストリア革命の可能性を考えるにいたったといえる。彼によれば、この孤立したオーストリア革命は、しかし、固有の困難に直面することが予測される。つまり、この場合、勝利したオーストリア革命は、孤立したままならば、資本主義的・反動的諸国の干渉の危険に脅かされる。また、孤立しては、大土地所有を農民らに分配するなど反革命のあらゆる芽を根絶することはできても、オーストリアにおける社会主義的計画経済の実現は、経済的に不可能である⁶⁾。「もしもオーストリア革命が全ドイツ革命かヨーロッパ革命の範囲内で行われるならば、教権ファシズムの独裁は、直接的にプロレタリアートの独裁にとって代わられる。それにたいして、オーストリア革命が孤立的になされるならば、プロレタリアートの独裁が可能となり現実的になるまえに、革命は種々の局面を経なければならないであろう。」⁷⁾

3月の時点で、パウアーがブルジョア民主主義の再建でなく、プロレタリアートの革命的独裁の実現を闘争の目標として打ち出したとき、その背景にはオーストロ・ファシズムが一定の安定をえているという認識があった。彼は、今や状況が変わったと判断する。そして、新たな状況のもとに新たな戦術を打ち出すのである。論文「革命の諸前提」では、彼は、近い将来に孤立したオーストリア革命が生じうると予測しつつ、革命の勝利の条件づくりの問題の考察に入っていく。この点、彼の次の発言は興味深い。

「労働者階級の革命的闘争力は、労働者大衆の直接的・現在の利害をめぐる絶えざる闘争においてのみ、労賃、労働諸条件、社会的諸権利をめぐる闘争からのみ発展しうる。」これらの闘争は、国家権力と大衆との衝突をもたらす。こうして、労働者層のその時々を経済的・社会的な諸要求をめぐる闘争は、全ファシズム体制にたいする革命に転化しうる。

「労賃，労働諸条件，社会的諸権利にかんする利害闘争のためには，労働者層は，何よりも労働組合およびストライキの自由を必要とする。…労働者，サラリーマンの直接的な経済的利害をめぐる戦いは，したがって，信条，結社，集会，ストライキ，出版の自由を要求する…」これらは，民主主義の前提であり，基礎である⁸⁾。

つまり，ここでバウアーは，日常的な改良闘争として「革命的闘争」をおこなうことを強調している。それは，結局，民主主義と自由の諸権利をめぐる闘争となる。ところで，前述のように，3月の時点で，バウアーは，ブルジョア民主主義の再建は，反ファシズム闘争の目標たりえないと述べていた。彼は，今や，この考えを変えたのであろうか？論文「革命の諸前提」は，この点，こう述べている。

ファシズムは，自由の諸権利の再建を求める労働者階級の要求に部分的に譲歩を強いられる。この譲歩は，不十分にしかなされない。というのは，民主主義的自由の諸権利の再建は，ファシズムの自己否定を意味するからである。したがってファシズム体制の枠内では，それは実現不可能である。かくして，自由の諸権利をめぐる闘争は，ファシズム体制にたいする革命に転化する。労働者階級は，権力を獲得した後，反革命の前提の破壊をめざす。そのためには，プロレタリアートの独裁が必要である。「闘争は，民主主義的自由の諸権利の再建をめぐる闘争として始まり，それからプロレタリアートの独裁で終わる。」

バウアーは，これを弁証法的発想という⁹⁾。彼は，この弁証法的発想について，結局，「民主主義的な自由の諸権利をめぐる闘争のテーゼとその闘争の結果としてのプロレタリアートの独裁というアンチテーゼは，…社会主義的民主主義においてはじめてジンテーゼを見いだす。」¹⁰⁾と結論づけている。

われわれは，バウアーのいう如上の弁証法的発想に強引さとか不自然さを感じる。民主主義と自由の諸権利を目標として闘争を展開するならば，闘争の結果は，やはり議会制民主主義を再建することにならないだろうか？結果がプロレタリアートの独裁になる必然性はないと思われる。結果がどうなるかは，闘争がおこなわれるその時々条件しだいであろう。われわれは，ここでバウアーが，最初にたてた革命的独裁という目標と日常的改良闘争を重視するにいたった後の考えとの辻褄あわせをおこなっているような印象を受け取るのである。

しかし，プロレタリアートの独裁という闘争目標を維持することは，オーストリア国内の急進化した労働者大衆と活動家の要求に応えるという意味では不可欠なことであった。それにたいして，自由と民主主義をめぐる闘争というスローガンは，非合法運動の活動家のあいだではきわめて不人気であった。だから，バウアーは，民主主義という言葉にたいする不満の声に応じて，あらためて民主主義の価値を強調しなければならなかった。これに関連して，彼は，改良主義と革命的社会主義の区別にも論究している。

バウアーによれば，改良主義と革命的社会主義は，労働者層のその時々利害と要求を

満足させるために部分的諸改良をめざすかどうかによって区別されるのではない。両者の区別は、改良主義が改良を自己目的にするのにたいして、革命的社会主義が改良を社会革命を実現する上での手段とするところにみられるのである¹¹⁾。

バウアーは、こう述べて、自由と民主主義の再建を当面の目標として掲げる自己の見解を擁護している。彼によれば、この自由と民主主義という目標は、小ブルジョア階級や農民の支持を獲得するうえでも重要な意味をもっている。

この点、バウアーが別の論文（1934年5月の『カンパ』誌上の論文「階級闘争の戦略」）で述べているのだが、工業労働者は国民のなかでは少数をなすにすぎない。したがって、労働者階級の範囲を越えて広い大衆基盤を獲得する必要がある。つまり、「小ブルジョア階級、農民層、知職人のかなりの部分が独裁にたいする憎悪に満たされ、工業労働者層の味方になる場合にのみ、工業労働者層は、ファシスト独裁にたいする革命的闘争で勝利するであろう。」¹²⁾

バウアーは、このように、工業労働者階級が国民の少数をなすにすぎず、したがって小ブルジョア階級、農民層、知職人の広範な大衆の支持を獲得する必要があると述べている。彼は、論文「革命の諸前提」でも、プロレタリアートのヘゲモニー下に広範な大衆の革命的闘争をおこなうべきだと主張する。その際、注目すべきことに、バウアーは、ナチスの支持にまわっているドイツ民族主義的な小ブルジョア階級、農民層、知職人に目を向けている。この点、彼はこう述べている。

教権ファシズムは、オーストリアの支配階級の指導を貴族と教会の手に戻したので、社会主義者とドイツ民族主義者たち Deutchnationale は、封建的教権的支配にたいする反対派になった。ドイツ民族主義者たちはナチスに結集する。もちろん社会主義者とナチの同盟は問題たりえない。しかし、労働者階級は、ナチスにとりこまれるのは許されないとはいえ、逆に、ドイツ民族主義的な、反教権ファシズム的な知識人や小ブルジョアそれに農民を、信条の自由などの自由の諸権利をめぐる共同の闘争に巻き込むことを試みなければならない。ドイツ民族主義的な知識人と小ブルジョア層それに農民は、職業選択の自由が奪われており、信条や職業の上でかなりの迫害を受けている。その指導者は捕われ、組織も破壊されている。したがって、彼らにあっても自由と民主主義の再建が切実な目標となる。それゆえ、民主主義的な自由の諸権利を目標として、労働者階級と小ブルジョア階級等は共同闘争をおこなうことが可能であり、またおこなわなければならない¹³⁾。

バウアーのこの考えは、彼が5月の時点で述べた考えと比較すると非常に興味深い。すなわち、5月の時点では、彼は、「安定したファシスト権力」という状況認識下に、小ブルジョア階級等の支持を獲得する手段として、社会主義的民主主義を持ち出している。すなわち、バウアーはこう述べている。

ファシスト独裁は、労働者のみでなく、知職人、小ブルジョア、農民からも自由の諸権

利と自治を奪った。これらの大衆は、独裁下でまもなく自由の諸権利と自治の価値を認識するであろう。その結果、ファシスト独裁にたいする彼らの闘争は、個人的自由、国民全体の自治、民主主義をめぐる闘争になる。われわれは、革命的独裁をめぐる闘争において労働者階級を動員しうが、この革命的独裁をより高次の民主主義(社会主義的民主主義)の過渡的形態として示すことによって、全勤労者階級の支持を獲得しうる¹⁴⁾。

バウアーは、要するに、社会主義的民主主義という目標を提示することによって、小ブルジョア、農民、知職人層の支持を獲得できると主張している。しかし、バウアーの説明によると、小ブルジョア、農民、知職人層が直接的にめざしているのは、いわゆる「ブルジョア民主主義」のはずである。かかる彼らに、社会主義的民主主義を示し、さらにこれが実現される前にプロレタリアートの「独裁」が必要だと述べるのが、どれだけ説得的な効果を生むのか、疑問とされる。論文「革命の諸前提」では、バウアーもさすがに説得力を欠くと思ったのか、別の論法を持ち出したのである。

すなわち、孤立したオーストリア革命の可能性が大きいという予測のもとで、バウアーは、いまや小ブルジョア階級や農民と共同闘争をおこなう上での共通の目標として、(ブルジョア)民主主義と自由の再建を語っている。もはや社会主義的民主主義が小ブルジョアや農民を引きつけるとは言われない。むしろ、民主主義と自由をめぐる労働者階級と小ブルジョア、農民、知職人の共同闘争が、いずれは民族主義的なブルジョア階級の独裁とプロレタリアートの独裁をめぐる両者の争いに転化すると述べている。そして、バウアーは、この争いでプロレタリアートの独裁の勝利を疑わないのである¹⁵⁾。

以上、われわれは、論文「革命の諸前提」を中心にして、反ファシズムの闘争方針と将来の展望にかんするバウアーの考えを検討してきた。とりわけナチス一揆後、バウアーは、反ファシズム闘争の将来についてかなり楽観的な展望をいただき、そう遠くない将来に孤立的なオーストリア革命の勃発がありうると考え、これにむけて具体的な闘争方針を提起したのであった。バウアーは、今や、労働者の経済的・社会的利害の実現とか自由と民主主義の再建とか、改良的な要求を掲げる。彼によれば、改良をめぐる闘争は、革命に結びつき、ひいてはプロレタリアートの独裁の樹立をもたらす。改良から革命へというバウアーの見解は、一見して、第一次大戦以前から彼がいだいてきた考えを踏襲しているという印象を与える。それは、結局、広範な大衆闘争として非合法闘争を展開するという考えに結びついている。そして、非合法の地下抵抗運動に要求される特殊な闘争方法にあまり細かい配慮をしないまま、大衆闘争を展開する上で必要となる大衆政党的な性格をもつ「非合法統一党」を形成する試みに結びついていったのである。

1) Otto Bauer, Voraussetzungen der Revolution, (*Der Kampf*, Jg. 1, 1934), in: WA., Bd. 9, S. 420.

2) Ebenda, S. 420f.

3) Otto Bauer, Die Strategie des Klassenkampfes, a. a. O., S. 375.

4) Otto Bauer, Die Revolution in Permanenz, (AZ., 17. 6. 1934), in: WA., Bd. 7, S. 525.

- 5) Otto Bauer, Die Revolution geht weiter !, (AZ., 29. 7. 1934), in : WA., Bd. 7, S. 535.
- 6) Otto Bauer, Voraussetzungen der Revolution, a. a. O., S. 421.
- 7) Ebenda, S. 427.
- 8) Ebenda, S. 422.
- 9) Ebenda, S. 423.
- 10) Ebenda, S. 424.
- 11) Ebenda, S. 428.
- 12) Otto Bauer, Die Strategie des Klassenkampfes, S. 375.
- 13) Otto Bauer, Voraussetzungen der Revolution, S. 424f.
- 14) Otto Bauer, Die Strategie des Klassenkampfes, S. 376.
- 15) Otto Bauer, Voraussetzungen der Revolution, S. 426.

(3) ウィーナー会議

既述のように、バウアーは、『アルバイター・ツァイツUNK』を「社会民主党機関紙」ではなく、「革命的社会主義者機関紙」にせよ、という「中央委員会」の要求にたいして、党名の変更は全党会議の要件であると述べて、これを退けた。バウアーは、やがてこの全党会議の開催を考えはじめる。もともと非合法活動諸グループを統一し、非合法党を形成することがバウアーのかねてよりの望みであった。逮捕された旧社会民主党活動家たちが解放され、非合法運動に加わってきたことも、この願望の実現に向けて、バウアーの考えを刺激した。こうして、バウアーは、7月8日付の『アルバイター・ツァイツUNK』紙上の論説において、統一非合法党の結成会議の開催を呼びかけるにいたった。

この論説でバウアーはまず、1888年のハインフェルト大会で、ヴィクトル・アドラーの指導下にオーストリア社会民主党が結成された、過去の輝かしい事例を思い出させる。この大会で、これまでハプスブルク帝国のタッフェ政府に弾圧されセクトに分散していた労働運動の統一が実現された。バウアーは、オーストリア社会民主党の結成いらい労働運動が飛躍的に発展した事実を指摘し、統一がいかにすばらしい成果をもたらすかを強調する。彼は、こうして、「第二のハインフェルト」の実現を訴えるのである。

バウアーによれば、2月闘争で旧社会民主党が破壊された後、労働者のなかでファシズム体制側におもねる徒輩が出たとしても、それはごくわずかであった。「労働者の90パーセントは、ファシズム独裁にたいする非和解的な革命闘争を望んでいる。」そして、この革命的闘争の目標は、プロレタリアートの独裁である。「労働者の90パーセントは、目標と目標達成の道の認識の点で一致している。思考における統一がそこにある。それは、組織の統一をも要求する。それは、党の統一を可能にする。新たなハインフェルトが可能である。」¹⁾

バウアーは、このように「新たなハインフェルト」を実現する 때가 来た と述べている。彼によれば、統一のもとになる様々なグループが存在する。「そのうち最強なのが革命的社

会主義者たちである。」バウアーは、『アルバイター・ツァイツUNK』紙上ではじめて、非合法運動の最強グループとして革命的社会主義者たちの存在を認めるにいたった。

バウアーは、続いて、青年労働者と共和国防衛同盟隊員に支えられた非合法運動の新諸組織と並んで、旧党組織の残存部分の存在を強調する。彼によれば、旧党組織の活動を担ってきた年上の労働者たちは、経験と知識にたけ、組織活動の上で有能である。したがって、青年と年長者を統一することが重要な課題となる。

バウアーのこの主張をみると、彼が旧オーストリア社会民主党の伝統に上になつて、「非合法大衆政党」(illegale Massenpartei)²⁾を結成する意図を抱いていたことがわかる。彼は、「非合法大衆政党」を形成することによって、青年の跳ねっ返りを抑え、同時に旧社会民主党活動家の希望を満たすことを考えたといえる。

社会民主主義的伝統の上に立った「非合法大衆政党」の結成という目的に関連して、興味深いことに、この時点で、バウアーは、共産党との統一戦線の問題について悲観的な考えを述べている。彼は、共産主義インターナショナルがファシズムによる社会民主党の破壊を歓迎した事実、さらに反ファシズム統一戦線の形成をまじめに目指したフランス共産主義者ドリオが党から除名された事実を指摘する。そして、共産主義者による統一戦線の呼びかけが、社会民主主義者に打撃を与えることを目的にしたものにすぎず、非合法党の統一にとってかえって妨げになることを強調している。

上の論説を受けて、バウアーは、さっそく会議の開催の準備にはいった。彼は、F・アドラーと相談し、会議に必要な資金の提供の承認を得た。また、非合法活動グループに会議の開催を告げて会議への出席を求めるために、ウィーンに使者を送った。

9月初めブリュン近くのある田舎町でウィーナー会議(Wiener Konferenz)が開催された。会議には、地区代表、「中央委員会」、バウアーら「外国ビューロー」のメンバーなど70人の代表が参加した。ゲストには、インターナショナルを代表してF・アドラー、ドイツの亡命グループ「ノイ・ベギネン」を代表してプラハからカール・フランク Karl Frankらが出席した。会議は、ザイラーを議長とする「正規」の中央委員会を選んだ。(革命的社会主義者の「中央委員会」メンバーのザイラー、ホロウベック Holoubek, フェライス Felleis, ラウシャー Rauscher ら4人、さらにバウアーが推薦した金属労働組合書記マイゼル Meisel かなる。)会議は、新しい党名を決める段になると、少し揉めた。が、結局、妥協の産物として、「統一社会主義党」(Die Vereinigte Sozialistische Partei)という党名が考えられた。バウアーらの編集する『アルバイター・ツァイツUNK』は、それにともない「オーストリア社会主義者機関紙」に変更された³⁾。

ウィーナー会議は、オットー・バウアーの指導の輝かしい勝利を意味し、亡命時代における彼の政治活動の絶頂をなした。確かに党名の変更を飲まなければならなかったとはいえ、妥協的な名前に落ち着かせることに成功したし、また、「中央委員会」が独自に発行してい

た機関紙『革命』の廃刊とアルバイター・ツァイツUNK』紙への機関紙の一本化に成功した。バウアーは、9月22日付の『アルバイター・ツァイツUNK』紙で、このウィーナー会議について報告し、「党の再建」を告げた。彼は、新党が旧社会民主党の伝統を継承するものであると、誇らかに宣言した。すなわち、「ウィーナー会議は、『オーストリア社会民主労働党の後継者であり相続者である』と新党をみなし、誇りをもってオーストリア社会民主党のこれまでの闘争と文化活動〈の正当性〉を認めるものである。」⁴⁾。このようにバウアーは、旧社会民主党の伝統との継承関係を維持することによって、これまでの自己の指導の正当性を基本的に確保した。そして、ウィーナー会議の声明のなかで、非合法活動における自己の闘争方針を貫いた。以下、『アルバイター・ツァイツUNK』にそって、この声明を紹介しよう。

声明は、まず、非和解的な革命的闘争によってファシスト独裁を打倒し、革命的独裁の手段によって獲得した国家権力の地盤を固めるという目標を提起する。この「労働者と農民の独裁」の歴史的な役割は、産業、林業、商業、銀行業の社会化によって資本家や大土地所有者の権力を奪い、社会主義社会の基礎を形成することにある。この任務を果たしたとき、道は、革命的独裁から社会主義的民主主義へと進んでいく。

革命的独裁を通して社会主義的民主主義へ、という目標は、いうまでもなく、亡命らしいバウアーが一貫して掲げてきたことである。声明は、バウアーのこの考えを改めて確認したものであったといえる。声明は、さらに、反ファシズムの「革命的闘争」の内容に一步踏み入った説明を与えている。

つまり、声明は、「革命的闘争」を大衆的闘争として展開する意図を示している。そのためには、自由労働組合と密接に提携し、日常的な経済的・社会的利害や自由の諸権利をめぐる闘争において労働者階級を統一し、こうして反ファシズムの革命を準備する任務が強調される。「オーストリアの全労働者階級の統一」がスローガンとして掲げられた。この統一にかんしていえば、共産主義者との関係について、声明は次のような考えを明らかにしている。

すなわち、「ウィーン社会主義者は、全労働者階級の統一したがって社会主義者と共産主義者との統一をも目指している。」その妨げは、共産主義者が、〈統一戦術の〉マヌーヴァーを使って、他の社会主義党を破壊し、支持者を集め、全プロレタリアートの指導を自らの方にもぎとろうとしていることにある。それにたいして、統一は、互いの組織的独立性を暫定的に維持し、資本主義とファシズムにたいする共同の闘争をおこない、互いの信頼を築くことによって準備される。理論的・組織的問題について互いに協定し、前提条件が満たされた後に、2つの党の統一が考えられる。それまで個々の社会主義者ないし社会主義者のグループが共産党の党大会とか会議に参加することは許されない。

声明は、このように、社会主義者（社会民主主義者）と共産主義者の統一を目標として

目指しながらも、その前提条件が整うまで、当面は反ファシズムの共同行動を共産主義者に呼びかけている⁵⁾。

先に、われわれは、バウアーが「非合法大衆政党」として「統一社会主義党」の建設を目指したと指摘した。今やこの目標は、基本的な部分において実現された。あとは、ウィーナー会議の決定を、地方の非合法組織に広め、これらを「統一社会主義党」に結集する課題が残されただけである。この当時のバウアーがたてた目標は、「非合法大衆政党」を中心にし、できるだけ広範な大衆的基盤の上に立って、反ファシズム闘争を展開することであった。しかし、反ファシズムの「大衆闘争」の展開は、後述のように、当時の現実において大きな壁に突き当たるにいたった。

1) Otto Bauer, Zum einem zweiten Hainfeld!, (AZ., 8. 11. 1934), in: WA., Bd. 7, S. 527.

2) この特徴づけは, Walter Pollak, a. a. O., S. 224 による。

3) J. Buttinger, a. a. O., S. 182ff.

4) Otto Bauer, Der Neuaufbau der Partei, (AZ., 22. 9. 1934), in: WA., Bd. 7, S. 542.

5) Ebenda, S. 537ff.

(6) 結びにかえて

以上、小稿では、1934年2月における労働者の闘争から同年9月における「統一社会主義党」(旧社会民主党を後継する非合法党)の設立にいたるまでのオットー・バウアーの活動について紹介し検討してきた。ここでこれまでの考察の小括と若干の補足をおこなうことにしよう。

亡命時代のバウアーの活動を理解する上での出発点は、やはり、彼が「2月闘争」における労働者の敗北をどう総括したかということにある。この点、『オーストリア労働者の蜂起』という小冊子で、バウアーは、確かに敗北についてみずからの責任と誤まりを認めた。誤まりの点でいえば、彼は、決してリンツ党綱領に集約されたオーストリア社会民主党の路線と基本的方針(オーストロ・マルクス主義)の誤まりを認めたわけではない。彼が誤まりと認めたのは、むしろ、その時々、具体的な・個別的な戦術についてであった。とりわけ、3月15日に決戦を決断しなかったことが犯した過ちのうち、宿命的な過ちであったと告白された。

2月闘争の以上の総括から、亡命時代にバウアーは、オーストリア社会民主党の伝統の守護者としての道を歩むにいたった。彼は、2月闘争におけるオーストリア労働者の英雄的な戦いを称揚することによって、旧党の威信と名誉を救えと思った。亡命時代の行動指針にかんするバウアーの考えをみると、そこには、リンツ党綱領らしいの一貫性の強調がみられる。つまり、リンツ党綱領のなかには、敵が民主主義の破壊を試みた場合には、労働者階級は独裁の手段でこれと戦うという規定がみられる。バウアーは、今や、この規

定を強調し、リンツ党綱領ですでにプロレタリアートの独裁のケースが考えられていたという。

非合法運動にたいしてパウアーが打ち出した行動指針は、結局、プロレタリアートの独裁の樹立をととして社会主義的民主主義を実現するために、反ファシズムの革命的闘争をおこなうことであった。非合法運動の目標は、もはやブルジョア的民主主義の再建ではなくてプロレタリアートの独裁の樹立である。このプロレタリアートの独裁は、社会主義的民主主義への過渡的な政治形態をなす。パウアーは、社会主義的民主主義の実現を目標とすることによって、社会民主主義の伝統的な考えとのつながりを強調する。

以上の見解は、パウアーが、『アルバイター・ツァイツUNK』紙上の論説や『キャンプ』誌上の論文で繰り返し述べた考えである。ただ、ナチス一揆前後から、彼は、オーストリアにおける非合法闘争の将来について楽観的な展望をいだきはじめる。そして、全ドイツひいては全ヨーロッパの次元における革命的な変革のまゝに、孤立的にオーストリア革命が生ずる可能性を考えはじめる。この場合、オーストリア革命の達成しうる目標は限定され、社会主義の実現は無理となる。こうして、パウアーは、孤立的なオーストリア革命を想定しつつ、非合法闘争の具体的なあり方として、幅広い大衆的な基盤の上にたった改良的な闘争を重視するにいたる。

彼によれば、非合法闘争は、一方では、自由労働組合と提携した労働者階級の日常的な経済的・社会的諸利害をめぐる闘争、他方では、自由の諸権利の復活をめぐって小ブルジョア、農民、知職人層の支持を獲得する活動を具体的な内容としている。パウアーは、この大衆的な非合法闘争を展開する上での前提として、旧社会民主党の伝統を継承した非合法の統一新党（かなり大衆的な性格をもった党）の結成を提起した。そして、1934年9月に「統一社会主義党」の結成にこぎつけるにいたった。

しかし、「統一社会主義党」の船出は、順調とはいえなかった。将来の楽観的な見通しにたった街頭での攻勢と「非合法大衆政党」のもとでの大衆的闘争の展開は、官憲の絶好の餌食となり、かなりの危険をともなった。ドルフス死後、その後を継いだシュシュニツク政権は、確かに強固な国民的支持基盤をもたず、安定性を欠いていたとはいえ、すぐにも倒壊するという性質のものでもなかった。大衆的闘争の直面する困難は、非合法闘争の停滞に結びつき、パウアーらの発行する『アルバイター・ツァイツUNK』紙の売行きの後退さえ招いた。

このような状況のもとで、非合法運動の転機は、早くも1934年から1935年の年替わりの時期にやってきた。運動の流れの転換を担ったのは、グスタフ・リヒター Gustav Richter（本名は、ヨーゼフ・ブッチンガー Josph Buttinger¹⁾）であった。彼は、ケルンテンで活動していた青年労働者で、10月中旬に「中央委員会」の地方担当者ラウシャーが逮捕された後、その後任となってから、メキモキと頭角をあらわした²⁾。彼は、パウアーらの楽観的

な考えにたいして、非合法闘争の長期化を予測し、大衆的な非合法闘争のあり方を批判し、より陰謀的な闘争方法をとるべきことを強調した。そして、旧社会民主党を小さくしたものにすぎないと思われる「統一社会主義党」にたいして、カードルの党組織をとるべきだと主張した。さらに、外国ビューローによる外側からの指導にたいして、オーストリア国内の非合法運動は独立するべきだと強調したのである。リヒターは、ウィーンの中央党組織にたいして、地方の指導者を結集し、ついにはザイラーにたいして年末に全国会議を開催する約束をとりつけた。

1934年12月31日、ブリュンで統一社会主義党の全国会議が開催された。ウィーンから40名、地方から15名が参加した。会議の2日目、リヒターは、「非合法組織の任務と問題」という報告をおこない、パウラーらの前で上述の彼の見解を開陳したのであった。この日の午後、リヒターは、異例なやり方だが、州代表者全国会議を開催した。そして、州代表者全国会議に次の決議をおこなわせることに成功した。

1. 統一社会主義党という名前を拒否し、革命的社会主義者を名のこと。
2. 『アルバイター・ツァイツUNK』紙を週刊ではなく、隔週の刊行とすること。
3. 機関紙『革命』を再刊すること。
4. 統一組織としての防衛同盟の自治を拒否すること。
5. 中央委員会と副地方担当者それに2人の地方代表者からなる全国指導部を形成すること。

クーデターにも近いリヒターと地方指導者たちによるこの方向転換を、パウアーとザイラーらは飲まないわけにはいかなかった³⁾。こうして、リヒターがオーストリア国内の非合法運動の中心的な人物として台頭していった。「中央委員会」指導部の交代は、その後まもなくおこなわれるにいたった。

1935年1月27日「中央委員会」議長のザイラーが逮捕された。これは、ウィーン官憲による非合法活動家の逮捕の嵐の先ぶれであった。2月に吹き荒れたこの逮捕の嵐で、非合法党組織は手痛い打撃をこうむった。だが、それは、他方では、指導部の新旧交代を促し、ザイラーの後を継いでリヒターが新指導部を形成するにいたった。1935年3月初め、新指導部は、統一社会主義党を清算し、革命的社会主義者を名のこと、『アルバイター・ツァイツUNK』紙を隔週発行に切り替えることを決定し、ブリュンの外国ビューローからの「完全な独立」を宣言した⁴⁾。

リヒターは、3月18日、オットー・パウアーらと話し合うためにブリュンにやってきた。パウアーは、長時間にわたってリヒターと語り、ついに状況の変化を認め、リヒターら新指導部とその方針を承認するにいたった⁵⁾。パウアーは、リヒターに好印象をもち、7月2日付のフリードリッヒ・アドラー宛ての手紙において「この男〈リヒター〉が2、3年の成長をへたならば、真の指導者となるであろう」と書いている⁶⁾。しかし、パウアーは、そ

の後もオーストリア国内の非合法活動家の尊敬を相変わらずかちえたとはいえ、他方でその直接的な指導力を失い、単なる助言者・相談役の地位に退くにいたった。それとともに理論的活動にたいする関心をいっそう強め、彼は、いわゆる「統合的社会主義」論の形成に着手することになったのである。

- 1) Walter Pollak, a. a. O., S. 224.
- 2) J. Buttinger, S. 239.
- 3) Ebenda, S. 242ff.
- 4) Ebenda, S. 256.
- 5) Ebenda, S. 261ff.
- 6) Otto Bauers Brief an Friedlich Adler, 2. Juli 1935, in : *WA.*, Bd. 9, S. 1085.

(1991年4月30日脱稿)